

# SLAVIC-EURASIAN RESEARCH

CENTER NEWS No. 159 April 2020

## 研究の最前線

### ◆ 2019年度冬期国際シンポジウム

《帝政ロシアの地方再訪：文学的想像力と地政学》開催される ◆



第一セッションの様子（マイクを握っているのが、ポルトゥノヴァ教授）

スラブ・ユーラシア研究センターでは、2019年12月13日と14日の二日にわたり、冬期国際シンポジウム「帝政ロシアの地方再訪：文学的想像力と地政学」Tsars' Regions between Literary Imaginations and Geopoliticsが開催されました。

近年のセンターは、ユーラシア地域大国の比較や境界研究など、周辺諸国との関係や世界の中にロシアや中東欧を位置付けることに取り組み、ロシアや中東欧以外の専

門家との連携を拡大・強化してきました。今回のシンポジウムは、旧ロシア帝国の領域から研究者をお招きし、ロシア帝国・ソ連内部の地域の多様性について再考し、新しい研究課題を新しい協力者とともに構想する第一歩となりました。昨年、北海道大学はセンターが提案部局となりモスクワの高等経済学院（HSE）と交流協定を締結しましたが、今回のシンポジウムは、HSEの国際研究プロジェクト「ロシアの地方史」（研究代表者：エカチェリーナ・ポルトゥノヴァ教授）[<https://www.hse.ru/rrh/>]との共催で組織されました。このプロジェクトとセンターの持つ人脈によって、ロシアの地方で斬新な成果を生み出している研究者が参加できました。したがって会議の言語はロシア語を主とし、英語を補助言語としました。

今回のシンポジウムでは、ロシア帝国の多様な人々が描いた文学的・地政学的な想像力に着目しました。そうすることで、国家権力との関係のみで意味が与えられがちな地方に関する歴史記述に対して、地域の人々の主体性がロシア史・ソ連史を形作ってきた側面に光を当てることができました。扱った地域を西から東に辿るならば、リトアニア・ベラルーシ、ウクライナ、スモレンスク、中央ロシア、オレンブルグ、東アナトリア・コーカサス、中央ア

ジア、シベリア、極東と旧ロシア帝国領を概ねカバーできました。時代としては、18世紀末から1930年代までが中心でしたが、ソ連末期から現在の極東や現在のウズベキスタンの話まで含めることができました。二日間の延べ参加人数は119名（うち外国人59名）で、議論は大いに盛り上がりました。参加者からは、ロシア語でこれほど濃密で高度な議論ができるのは国内では北大のセンターしかなく、世界でも稀有であると評されました。[長縄]



熱心に聞き入る聴衆

### ◆ NIHU 北大拠点共催シンポジウム「鹿児島で北東アジアを考える」◆



鹿児島セッション1のようす

2019年12月21日（土）に鹿児島大学でシンポジウム「鹿児島で北東アジアを考える」が開催されました。本シンポジウムは、人間文化研究機構ネットワーク型基幹研究プロジェクト「北東アジア地域研究推進事業」北海道大学スラブ・ユーラシア研究センター拠点と鹿児島大学国際島嶼教育研究センターとの共催で企画・組織されました。鹿児島は歴史的に日本の南のゲートウェイとして、アジア諸国だ

けでなくヨーロッパとのつながりがありました。このような「海」を介した交流という視点を念頭におきながら、北東アジアを考えてみよう、というのが本企画のコンセプトの一つでした。

第一セッションは、「北東アジアの国際関係：歴史、理論、比較」というテーマで専門地域の異なる3名の研究者に報告をしていただきました。金成浩（琉球大学）による報告「北東アジア冷戦構造の変容と北朝鮮」は、1980年代末から1990年代初頭にかけてのクロス承認問題をめぐる、韓国、北朝鮮、ソ連、日本、中国の政策決定過程を検証し、北朝鮮の核開発の起点については諸説あり、まだ明らかにされていないが、ソ連による一方的な切り捨てを始めとする1980年代の国際関係の構造的変化が北朝鮮の核開発を加速化させたことは確かであろうと指摘しました。

佐橋亮（東京大学）による報告「北東アジアの安全保障秩序：米中関係と米同盟ネットワークの相互作用」では、戦後アジアの秩序に注目し、その形成と現在までの変容について取り上げました。イヴェリン・ゴーによる先行研究では、1970年代に米中が接近することによって地域の平和の基盤が達成されたことが指摘されています。これに対して佐橋報告は、日米同盟の安定の一方で、朝鮮戦争後、米中が戦争を回避してきたことがこの地域の平和の基盤

だったのではないかという見方を提示しました。そして、過去30年間の日米中の三角関係の変化を論じたうえで、戦後アジア地域の安定が維持されていたのは、中国がアメリカの同盟（ネットワーク）を認めていたためであり、今後この基盤が崩れてしまえば、地域秩序は相当不安定化するのではないかと指摘しました。

宮脇昇（立命館大学）による報告「地域対話におけるモンゴルの役割：欧州の経験から」では、政治体制や経済体制の違いを超えて、加盟国間でヘルシンキ宣言に盛り込まれた10原則を共有し守って行こうという欧州安全保障協力機構（OSCE）の成り立ちと、中立政策をとる諸国のブロック「N+N」がCSCE/OSCEの発展に果たした役割について説明しました。そして冷戦終結後の北東アジアにおいて、「新しいヘルシンキ」を目指すモンゴルの役割について、同国がイニシアチブをとる「ウランバートル対話」を事例に検討しました。

コメンテーターの尾崎孝宏（鹿児島大学）からは、北東アジアの安全保障を北朝鮮イシューとして見た場合にはモンゴルは地政学的に重要な役割を果たしうるが、中国イシューとして見た場合、モンゴルの存在感は小さくなるのではないかという疑問が出されました。同じくコメンテーターの益尾知佐子（九州大学）は、日本と中国、それ以外の国々の間でも政治、安保面の対立を抱えていても経済は維持するというコンセンサスがあるのではないかと、この地域における秩序を考える場合、経済ファクターをもっと考慮すべきではないかという点を指摘しました。

第二セッションは「島と海：アジアと欧州の比較」というテーマで、それぞれキプロス、奄美、鬱陵島をフィールドとする3人の研究者が報告をおこないました。伊藤頌文（慶應義塾大学）は「分断のキプロス：紛争と統合の狭間」と題して、ヨーロッパで最も「凍結された」民族紛争と呼ばれる、キプロス島の分断問題を取り上げました。キプロスは、1974年の紛争でトルコが軍事侵攻し、多数派のギリシャ系住民が住む南部「キプロス共和国」（\* EU加盟）と少数派のトルコ系住民が住む北部「北キプロス・トルコ共和国」（\* 1983年に独立宣言。トルコのみが承認）の分断が固定化しました。キプロス紛争を題材とする平和構築論は、再統合＝平和回復という文脈で論じられる傾向にあるのに対し、伊藤報告は南北間の人や車両の往来がかなり自由化されていること、島内5カ所のクロスポイントが機能し、むしろ名所として観光化されている内実を取り上げ、「分断による平和」という現在のキプロス島の実態を直視した上で平和について考える必要があることを指摘しました。

平井一臣（鹿児島大学）は、「島尾敏雄のヤポネシア論再考」というテーマで、戦後約20年間奄美で生活して創作活動をおこなった作家・島尾敏雄のヤポネシア論や琉球弧論について、これらが形成された1960年代から70年代にかけての日本の政治社会状況との関係から再考しました。島尾のヤポネシア論は1961年に発表されていますが、当初から柳田國男の南島論の強い影響下にあることが指摘されており、南島に日本の源郷を見いだそうとする南島イデオロギーを代表するものとして扱われてきました。この点に関して、平井報告は、当初



鹿児島セッション2のようす



生活者の視点から奄美を理解したいと発言していた島尾は、奄美の本土復帰後の急激な開発とそれによる奄美社会の変化のなかで、決意に揺らぎが生じ、むしろ奄美を理解することの難しさから、生活者としての奄美理解を断念していたため、ヤポネシア論を深めていくことができなかったのではないかと、という見方を示しました。そして学術的な装いをまとったヤポネシア論から離れて、ヤポネシア論の失われた可能性を再考する必要性を訴えました。

福原裕二（島根県立大学）は、「竹島／独島の属島と化される鬱陵島」というテーマで、日本と韓国の係争地である竹島／独島にもっとも近い有人島である鬱陵島（ウルルンド）の変化について、フィールドワークと統計データに基づいた報告をおこないました。鬱陵島で住民登録をしている人数は2017年現在10,123人（実際の居住者は8,000人程度と見られる）であり、実質的に韓国の人々が生活を営む空間としては最東端に位置する離島です。この島は従来スルメイカ漁と農業で知られており、現在は観光が産業の中心となっています。鬱陵島が「国境の島」として意識され始めたのは朴正熙政権下で開発が始まった時でした。その後大きな転機を迎えたのが、2005年に島根県議会が「竹島の日」を制定し、日韓間で竹島／独島問題が先鋭化した時期です。これ以降、鬱陵島では韓国政府によって「独島教育、啓発」のための観光地化が推進され、竹島／独島の属島化が進められました。福原は、このような現状の問題点として、属島化によって鬱陵島への資金や資材の投下は著しいが、従来からこの島で発展してきた産業にその恩恵が及んでいないこと、このような政府や慶尚北道による政策が、地元住民の意向を問うことなく進められているのではないかと、という問題を提起しました。

コメンテーターの上原良子（フェリス女学院大学）は、海洋に浮かび、大国に囲まれた島の政治をどう分析すべきかという点に関して、ヨーロッパの「内海」としての地中海研究との比較の観点から、三つの分析視角を提示しました。一つは、島の外交力や政治的したたかさ、あるいは独自のイニシアチブに注目する方法、二点目として、経済成長と地域のアイデンティティの変化の関わりに着目してみるやり方、また三点目として、他者が抱く「地中海」や「南の島々」へのエキゾチックでロマンチックなイメージと、島の内部の実態の違いの差異が、何らかのボーダー（境界）を形成しているのではないかと、という視点を挙げました。もう一人の討論者である堀江典生（富山大学）は、位置する地域、島の規模、属性が大きく異なるキプロス、奄美、鬱陵島を比較する上で、島のランドスケープ（物理的構成要素の集合体。それは利害関係者により空間認識され、意味付けされる）、外部利害関係者、島の「根っこ」、の三要素の相互作用に着目すると、島嶼の境界性の特徴がより分かりやすくなるのではないかとコメントしました。

今回のシンポジウムでは、北東アジアの地域秩序を大国間関係で捉えるか、それとも経済などの要素を考慮してより多様なアクターによって構成されるものと見なすべきか、また海域アジアと島嶼の役割を視野に入れた時、どのような分析視角が有効かなど、創造性の高い議論が展開されました。当日は、奄美分室からの中継も含めると約50名の聴講者が入り、大変盛況となりました。[加藤]

### ◆ 上智大学村田ゼミ合宿 ◆

2019年10月12日（土）に、毎年恒例となっている上智大学村田真一教授のゼミ生たちによる報告会がスラブ・ユーラシア研究センター大会議室でおこなわれました。この会は卒業論文を控えた4年生を中心とした合宿の舞台となっていて、SRCの院生・若手研究者との知的交流を一日体験してもらおうという企画です。受け入れ教員が望月哲男氏（現北海道大学名誉教授）の時に始まり、越野剛氏（現東京大学助教）を経てこの会も今回で7回目を数え、もはやセンターの伝統行事のひとつになったと言ってよいでしょう。今回は札幌大学から岩本和久教授や宮川絹代助教も参加してくださいました。

ゼミ生の報告は大きく3セッションに分かれ、一人10分程度の報告と質疑応答がおこなわれました。斎藤慶子氏（SRC）が司会を担当したセッション1では舞台芸術をテーマとして、帝室劇場独占禁止の影響、エスケテルの舞台衣装と装置のリズム、ブルガーコフの戯曲『赤紫の島』についての報告がおこなわれました。上村正之氏（北大院）が司会を担当したセッション2ではロシア



報告会のようす

文学における食文化の表象、バフチンのグロテスク・リアリズム、アゼルバイジャンのロシア語文学『石の夢』についての報告がおこなわれました。後藤正憲氏（SRC）が司会を担当したセッション3では、ヴォルコフ『シオスタコーヴィチの証言』をめぐる議論を元にシオ



札幌の食と楽しい会話を満喫中

スタコーヴィチ像の形成プロセスを考察する報告、チェスとロシア人の関わりについての報告、ロシアの若者サブカルチャー「ゴブニキ」に都市文化構築の要素と特徴を探る報告がおこなわれました。テーマの多彩さと着眼点の鋭さ、資料や討論の相手への誠実な取り組みに普段の村田ゼミの様子が伺える充実した報告会となりました。

これも毎年の恒例でSRCからも模範報告がおこなわれました。後藤正憲氏が「固有名で呼ぶことと名づけること：ゲンナジイ・アイギのロシア語詩における空間」、斎藤慶子氏が「19世紀末のロシア・バレエにおけるジャポニスム：バレエ・パントマイム『月から日本へ』（1900年、キスリンスキー作曲）を例に」をそれぞれ報告してゼミ生たちにアドバイスを送るとともに、活気のある討論がおこなわれました。

報告会の終了後は野町教授やドブレニコ特任教授、ゴルバチョフ特任准教授を交え、札幌の食と楽しい会話を皆で満喫しました。[安達]

これも毎年の恒例でSRCからも模範報告がお



◆ サント・ペテルブルク大学から文学・文化研究者二名を招へい ◆



セミナーのようす

サント・ペテルブルク大学ロシア文学史講座からニコライ・グシコフ准教授とアンドレイ・ココーリン助手を招へいし、2019年10月22日（火）にスラブ・ユーラシア研究センター小会議室でセミナー「1920-30年代ソ連における映画と文学：相互作用の諸段階と全体的な傾向」が開催された。今回の招へいは、2019年度「スラブ・ユーラシア

地域（旧ソ連・東欧）を中心とした総合的研究」共同研究班②スラブ・ユーラシア地域におけるメディア文化史の共同研究（担当：安達大輔）班員古宮路子氏（日本学術振興会・特別研究員PD）の尽力により実現したものである。同講座のスタッフがSRCを訪問するのはこれが初めてとのことで、今後のSRCとの研究交流への期待を持たせるものとなった。

当日は祝日にもかかわらずSRCからドブレニコ特任教授・コロリョフ特任准教授、文学研究院から大西郁夫教授、札幌大学から岩本和久教授・宮川絹代助教が参加して、充実した報告に続いて熱心な質疑応答がおこなわれた。映画は日本のロシア・ソ連文化研究において現在もっとも進展が待ち望まれる分野のひとつであり、その意味でグシコフ准教授が1920-30年代ソ連における映画と文学の関係を概観し、ココーリン助手がより具体的に作家オレーシャと映画の関係を論じた今回のセミナーは研究状況の発展に寄与するものであった。その一方で、他の芸術ジャンルやメディアとの接点が多い映画研究の特性上、英語で報告をおこなうなど必ずしもロシアを専門としない研究者を積極的に巻き込んで行く必要も感じられた。



左から古宮氏、ココーリン助手、グシコフ准教授

両氏はその後東京に移動して早稲田大学で開催された第69回日本ロシア文学会に参加し、10月26日（土）には古宮氏が組織したパネル「ロシア文学のテキスト学と資料研究の諸問題」に登壇した。三好俊介准教授（駒澤大学）がチェアを、古宮氏がコメンテータを務めたこのパネルではグシコフ准教授が「マルシャークの詩『アイスクリーム』の創作史の諸問題」、ココー

リン助手が「物語『カール・キャメロンの頭』：オレーシャ『羨望』の初期稿か？」と題する報告をおこなった。さらに宮川絹代助教による報告「亡命文学とロシア文学の相互関係確定の基礎としての亡命文学のテキスト学・アーカイブ研究（ブーニンの創作を例に）」があった。アーカイブ資料を用いる研究者たちによるソ連の文学作品の創作史やロシア文学と亡命文学の資料面での統合の動きをめぐる報告とコメントは、それに続く議論も含めて日本のロシア・ソ連文学研究では数少ない本格的なテキスト学に触れる貴重な機会となった。[安達]

### ◆ 北海道大学共同利用・共同研究拠点アライアンス部局横断シンポジウム「計算科学が拓く汎分野研究」◆

2019年10月31日（木）に、医学部学友会館フラテホールで北海道大学共同利用・共同研究拠点アライアンス部局横断シンポジウム「計算科学が拓く汎分野研究」が開催された。北大内の共同利用・共同研究拠点の4附置研（低温科学研究所、電子科学研究所、遺伝子病制御研究所、触媒科学研究所）と4研究センター（スラブ・ユーラシア研究センター、人獣共通感染症リサーチセンター、情報基盤センター、北極域研究センター）が連携して「北海道大学共同利用・共同研究拠点アライアンス」を作り、今回研究交流のための合同シンポジウムを開催する運びとなったものである。すでに2017年度末に「第1回創成研究機構フォーラム：北大研究所・センターが提案する国際化戦略」を開催しているが、これは北大の国際化に関する機能強化に資することを目的としていた。それに対して第2回目に当たる今回は、共同利用・共同研究拠点間の研究交流を通して北大の研究力強化につなげていくことを目標に掲げた。

当日はSRCから諫早庸一助教が講演（「中国天文学を「計算」したペルシア学者：13・14世紀モンゴル帝国期ユーラシアにおける「天文対話」）およびパネル討論で登壇し、高橋美野梨助教（「非生物資源開発は、北極先住民族社会における『在来知』とどの程度親和性を持つか」）と大学院生の寺岡郁夫氏（「ウクライナの人口と産業の地域差」）がそれぞれポスター発表をおこなった。その他仙石センター長がポスター賞授賞式で登壇したほか、安達が実行委員（ケータリング担当）として準備運営に参加、当日は諫早氏の講演で司会を務めた。



パネル討論中の諫早助教



高橋助教のポスター発表

SRC 以外の共同利用・共同拠点はいわゆる理系中心でシンポジウムのテーマも SRC として決して日常的に接するようなものではなかった。このような状況で若干の手軽さを事前に感じざるを得なかったものの、当日の報告やパネル討論では、他分野の研究者にもわかりやすくという事前に案内されていたコンセプトの通りの内容が多かった。シンポジウム全体として今後の多分野交流や連携にも積極的な姿勢が見られたが、具体的な取り組みとなるとなかなか明確な輪郭を描いたり個別の方策を提示するのは難しかったようだ。その点で異文化交流の豊かさだけでなくそこに潜む「わかり合えなさ」をも歴史的な視点から検証した謙早講演は、異なる者たちが交流する難しさを見つめることで初めて真に生産的な学術の協働がスタートするのだと説き、会場に大いに刺激を与えていた。今回のシンポジウムがきっかけとなって、今後文理をつなぐような新しい試みに発展することを期待したい。[安達]

### ◆ RCCZ-NIHU ラウンドテーブル「北東アジアをめぐる日韓の対話：平和、安全保障、エンパワーメント」◆



会議終了後の集合写真

2020年1月12日(土)に、韓国の中央大学校でラウンドテーブル「北東アジアをめぐる日韓の対話：平和、安全保障、エンパワーメント」が開催されました。このイベントは、人間文化研究機構ネットワーク型基幹研究プロジェクト「北東アジア地域研究推進事業」北海道大学スラブ・ユーラシア研究センター拠点と韓国中央大学校境域における和解と共生研究セン

ター (RCCZ) の2回目の共同企画として実施されました。

第一セッションは、安全保障と平和をテーマに、岩下明裕 (SRC)、ヒョン・デソン (韓国海洋水産開発院)、加藤美保子 (SRC)、ナム・サング (東北亜歴史財団) が登壇し、北東アジアのパワーバランスの変化や北朝鮮の脅威に対する対処の選択肢などの論点について、国家レベルの対立構造のみならず、実際の人の移動の動向や貿易、文化交流の実態についても意見交換がおこなわれました。

第二セッションは、市民社会とエンパワーメントをテーマに、イム・ギョンファ (RCCZ)、池直美 (北大 HOPS)、ハン・ヘイン (成均館大学東アジア歴史研究所)、天野尚樹 (山形大学)、リ・シンチョル (歴史デザイン研究所) が登壇し、北東アジア情勢の安定のために、国際社会はどのような代替策や解決法を見いだせるのか、上 (国家) からの保護と同時に下からのエンパワーメントはどのようにおこなわれるべきか、というテーマについて議論されました。このセッションでは、歴史認識をめぐる国家間対立における歴史家の役割から、国家のセイフティネットからこぼれ落ちる移民や貧困の問題にどう向き合うべきか、という多岐にわたるテーマが話し合われました。

過去1年間を振り返ると、徴用工問題への対処をめぐって日韓関係は複雑に拘れている状



況です。しかし、北東アジア全体の平和に目を向けると、日韓両国の政府だけでなく、市民一人一人の和解と協力を模索する努力が必要であることに気付かされます。今回のラウンドテーブルは、関係改善と相互理解を深化するための方策を導き出し、両国間のネットワークを強化する小さな一歩となることを目指す試みでもありました。[加藤]

### ◆ ArCS テーマ7 総括シンポジウム開かれる ◆

2020年2月14日(金)、ArCSプロジェクトのテーマ7がこれまでにこなってきた活動を総括するシンポジウムが開かれました。東京大学駒場キャンパス教養学部ホールで開かれたシンポジウムは、56名の参加者を集めておこなわれました。第1部では、3名の講演者が順にArCSテーマ7の具体的な活動内容とその成果を発表しました。第2部は、前もって用意された政策決定者向けの報告書(案)をもとにしながら、ArCS構成メンバー7名に内閣府と産業界から有識者3名を交えて、パネルディスカッションの形式



総括シンポジウムのようす

でおこなわれました。産官学の代表が顔を合わせて意見を交換する場となった会場では、パネリストに対して様々な角度から積極的な意見と質問が飛び交うとともに、立場の違いによる意見の相違も明確に現れました。『これからの日本の北極政策の展望』と題した報告書は、議論の内容を受けて修正され、ArCSウェブサイトでは2月末から公開されています。[後藤]

<https://www.arcs-pro.jp/about/pamphlet.html>

### ◆ スラブ・ユーラシア叢書『北極の人間と社会：持続的発展の可能性』の刊行 ◆

2015年度からおこなわれていた北極域研究推進プロジェクト(ArCS; Arctic Challenge for Sustainability)が、2019年度で終わりを迎えます。プロジェクトは全部で8つのテーマに分かれて進められましたが、その中で唯一人文・社会科学のテーマ「北極の人間と社会：持続的発展の可能性」の研究成果をまとめたものが、北海道大学出版会のスラブ・ユーラシア叢書から刊行されました。近年注目の高まっている北極域でのエネルギー資源の開発や、その地域で暮らす人々を取り巻く自然と文化、また地域の環境保全や安全保障のための国際的な法と組織の枠組み作りといった問題が取り上げられています。目次は次の通りです。[後藤]

#### 『北極の人間と社会：持続的発展の可能性』

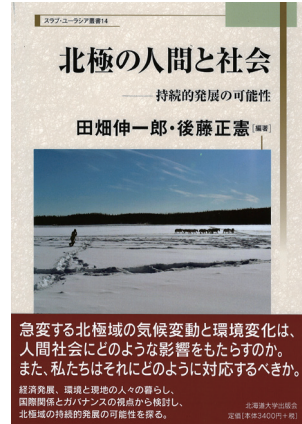
田畑伸一郎・後藤正憲編

北海道大学出版会、2020年2月刊行、296頁。

序章：持続的発展を目指して(田畑伸一郎・後藤正憲)

第1部：経済開発

- 第1章：北極海航路（大塚夏彦）
- 第2章：石油とガス（田畑伸一郎・本村真澄）
- 第3章：漁業（成田大樹・平譯享）
- 第2部：環境と人間
- 第4章：凍土と文化（後藤正憲・中田篤・飯島慈裕）
- 第5章：変化と適応（藤岡悠一郎・高倉浩樹・田中利和・ステパン・グリゴリエフ）
- 第6章：先住民とモニタリング（近藤祉秋）
- 第3部：ガバナンス
- 第7章：国際関係（大西富士夫）
- 第8章：北極評議会（稲垣治・幡谷咲子）
- 第9章：国際法に基づく秩序づくり（柴田明穂）
- 第10章：開発と先住民（高橋美野梨）
- あとがき（田畑伸一郎）



◆ 2020年度「スラブ・ユーラシア地域（旧ソ連・東欧）を中心とした総合的研究」にかんする公募結果 ◆

共同利用・共同研究拠点の事業として、例年通り「プロジェクト型」の共同研究、「共同利用型」の個人による研究、センターが設定した課題による「共同研究班」の班員の募集をおこないました。2020年1月25日の共同利用・共同研究拠点課題等審査委員会において応募者を審査した結果、以下の方々が採択されました。[編集部]

2020年度採択者一覧

1「プロジェクト型」の共同研究

	申請者氏名 (代表者)	所属機関・職	研究課題名
1	北井 聡子	大阪大学大学院言語文化研究科・講師	19世紀末～20世紀ロシアにおける近代の超克：超越性を中心に
2	中塚 武	名古屋大学大学院環境学研究科・教授	「14世紀の危機」に関する文理協働研究：北東アジア地域を突破口として
3	松澤 祐介	西武文理大学サービス経営学部・教授	スラブ・ユーラシア地域の鉄道の変革
4	門間 卓也	日本学術振興会・特別研究員 PD（関西学院大学）	戦間期東欧社会の権威主義体制と極右民族主義勢力の分析：グローバル・ファシズムの潮流に注目して

2「共同研究班」の班員

	申請者氏名	所属機関・職	テーマ
①班	吉村 貴之	東京大学大学院総合文化研究科・学術研究員	①近現代の中央ユーラシアに関する共同研究
②班	古宮 路子	日本学術振興会・特別研究員 PD（埼玉大学）	②スラブ・ユーラシア地域におけるメディア文化史の共同研究
②班	平野恵美子	東京大学大学院人文社会系研究科・準研究員	

## 3 「共同利用型」の個人による研究

	申請者氏名	所属機関・職	研究課題名
1	井上 岳彦	大阪教育大学・特任講師	ロシア帝国とイギリス帝国の仏教徒による越境的交流に関する研究
2	神原ゆうこ	北九州市立大学・准教授	中東欧諸国における「ポスト社会主義の終焉」についての検討：研究史上の認識と現地の認識の差を手がかりとして
3	齊藤久美子	和歌山大学経済学部・教授	ロシアにおける企業財務と経営分析
4	鈴木 理奈	札幌医科大学・北海学園大学・非常勤講師	ロシア語における数詞の位置づけと品詞形成に至る過程：数詞の形態と他品詞との共通性
5	高橋沙奈美	九州大学大学院人間環境学研究院・講師	ウクライナにおける正教会分裂の現状に関する社会学的研究
6	保坂三四郎	在ウクライナ日本国大使館・専門調査員	ウクライナ危機を巡る戦略ナラティブ研究：日本のアカデミア及びジャーナリズムのナラティブとロシアの戦略ナラティブの比較考察
7	道上 真有	新潟大学人文社会科学系(経済学部)・准教授	ソ連および現代ロシアにおける経済思想と都市経済開発の相関関係

## ◆ 専任・非常勤研究員セミナー ◆

ニュース前号以降、専任研究セミナーが以下のように開催されました。

## 助教セミナー

11月7日：諫早庸一 “Birūnī’s Revival along the Mongol Silk Roads: Jamāl al-Din’s Armillary Sphere on Latitude 36°”

コメンテータ：矢野道雄（京都産業大学名誉教授）

提出されたペーパーは、ハンガリーの雑誌の特集号用に執筆しているものだった。内容は、ビールニーという10～11世紀に現在のイランの地で活躍した学者による天文学上の研究を扱うものでした。報告者の関心は、モンゴル帝国の統治下における東西の天文学の交流にあり、ビールニーの研究が13～14世においてイルハン朝で評価されただけでなく、元においても評価されたことを示したところに、ペーパーの貢献がありました。舞台がペルシアや元で、分野が天文学ということで、出席者にとってはなかなか難しいペーパーでしたが、コメンテータからは、ビールニーのイスラーム世界の学問における位置付けから、ペルシア語の英訳に関する細かなことまで、多くのコメント・質問が出されました。ペーパーのタイトルに関しては、revivalということの意味や、主題と副題の関係などについても、質疑応答がありました。[田畑]

11月14日：高橋美野梨「基地政治とデンマーク」

コメンテータ：川名晋史（東京工業大学）

提出されたペーパーは、コメンテータが編集を担当している『国際安全保障』誌の特集号「基地研究の先登」のための原稿とのことでした。チューレ空軍基地をグリーンランドに置いているために自治領グリーンランドに依存せざるを得ないデンマークが、2003～2004年にグリーンランドに対して安全保障領域での発言権を増大させるような措置を取ったのは何故なのかを問う内容でした。合理的な判断に基づけば、そのようなことにはならないはずだから



ということで、報告者が強調したのは、デンマークにおける多元的な民主主義の諸相でした。このような見方に対しては、コメンテータをはじめとする参加者から、そのような政治文化的なものに回答を求めてよいのかとか、2003～2004年に本当に大きな変化が生じたのかとかなどの意見が出されました。このほか、NATOとの関係、民主主義の理解の仕方、沖縄との比較など、出席者全員から多くの質問やコメントが出て、討論が大変盛り上がりました。[田畑]

12月18日：後藤正憲「サハ在来種のウシとウマをめぐる非対称性」

コメンテータ：近藤誠司（北海道大学総合博物館）

報告者は、近年、サハ共和国でおこなってきた牧畜の調査を通じて、ウシとウマの二項対立に関心を持つようになり、そのなかで一つの鍵となっている在来種と外来種の問題に焦点を当てて論文としてまとめてみたということでした。コメンテータは家畜、畜産の分野の著名な専門家であったため、普段は聞くことのできないような領域の議論が展開されることになりました。おかげで、ウシとウマでは多くの点で大きな違いがあることについて、さらに認識を深めることができました。討論のなかでは、科学者間での議論のなされ方、科学者・学識者と政治指導者の関係、サハ人が移住してきた当時の食生活や牧畜、サハのなかの地域的な違いなど、多様な論点が出され、ルイセンコや遺伝学の問題についても議論がなされました。牧畜の奥深さとサハにおける牧畜の重要性を再確認する場となりました。[田畑]

1月31日：加藤美保子「『東方シフト』のなかの方向転換：米口対立下のユーラシア新秩序の模索」

コメンテータ：堀内賢志（静岡県立大学）

今回のペーパーは、昨年11月に開催されたロシア・東欧学会での報告を基にしたもので、同学会の学会誌『ロシア・東欧研究』に現在投稿中のものです。ここではプーチン政権下の東方政策について、「旧ソ連の同盟国・友好国との関係改善による孤立の克服」から、「大国としての自信回復と太平洋国家への野心拡大」、そして「対米関係悪化による対中傾斜とユーラシアへの回帰」へという変化があり、これには米口関係の動向が影響を与えているという議論が提起されました。コメンテータの堀内氏はこのペーパーに対して、インドや東南アジアおよび米国ファクターも考慮し、幅広い視覚と包括性をもった論文であると評価した上で、ロシアの多国間制度および六者協議への関心の度合、ロシアの急速な中国接近の位置付け、欧米諸国の動向とロシアの対アジア政策との関係、ロシアにとっての日本や韓国の位置づけなどについてのコメントをおこないました。フロアからは、さまざまな2国間関係の相互作用及び連関、「同盟」という用語の定義・用い方、ロシアが中国に接近することの意味、論文の組み立ての形など、さまざまな論点からのコメントがありました。[仙石]

### 非常勤研究員セミナー

12月25日：村上智見「モンゴル高原オロン・ドヴ遺跡出土染織品の研究」

コメンテータ：齋藤茂雄（大阪大学）

提出されたペーパーは、報告者が続けているモンゴルでの発掘調査から得られた染織品について分析したものでした。この出土染織品については、いつ誰がどこで作ったのかを確定することができておらず、このペーパーではそれらに関する仮説が提示されました。特に問題とされるのは、墓の築造年代と染織品の特徴から推測される染織品の製作年代とのズレで、報告者は、この墓はウイグル可汗国（ウイグル帝国）崩壊後の9世紀後半～10世紀初め頃に当地に残った回鶻人（ウイグル人）によって築造されたという説を示しました。コメンテータからは、唐とウイグル、契丹（遼）とウイグルの関係史からのコメントがなされました。討論では、墓の形状と宗教との関係やこの時代における日本との関係（平安時代の正倉院など）についても議論が展開されました。[田畑]

1月22日：伊藤愉「ロシア演劇学の誕生：レニングラード学派とメイエルホリド」

コメンテータ：八木君人（早稲田大学）

提出されたペーパーは、長い間調べていたテーマのもので、現在投稿中ということでした。内容としては、レニングラードのロシア・フォルマリズム運動の中心地である芸術史研究所に焦点を当てて、演劇学の創設に向けた活動とメイエルホリドとの関係性を明らかにしようとしたものでした。芸術史研究所では異なるジャンルの交流がなされ、学際的な活動が見られたものの、これに関する先行研究は少なく、報告ペーパーは情報としても価値があるということでした。討論のなかでは、1920年代と30年代の違いということが論点の一つになったように思われました。この研究所の活動が1930年代にどう変わっていくのかについての質問が出され、また、ペーパーのなかで使われている「伝統」という言葉に関しても、その中身についての質問がありました。[田畑]

#### 学術研究員セミナー

12月6日：斎藤慶子『「バレエ大国」日本の夜明け チャイコフスキー記念東京バレエ学校1960-1964』から「第8章 学校閉鎖とその後」

コメンテータ：草野慶子（早稲田大学）

提出されたのは、2019年末までに刊行予定の単著で、それは、2019年1月に博士号を取得した論文をまとめたものでした。セミナーでの検討箇所とされたのは、「第8章 学校閉鎖とその後」の1節から5節まででした。本の内容は、1960年にソ連バレエを受け継ぐ東京バレエ学校が誕生したものの、1964年に閉鎖となり、それが東京バレエ団に引き継がれていくプロセスを描いたものでした。討論では、東京バレエ学校の創設者である林広吉と学校を引き継いだ佐々木忠次の描き方について多くのコメントが出されました。また、ソ連バレエの日本での受容について、他のバレエとの比較など、相対化が必要ではないかなどの意見も出されました。東京バレエ学校の閉鎖が中ソ対立にも関係していたことから、当時の国際関係や政治状況の理解についてもコメントが出るなど、幅広い視点から討論がなされました。なお、コメンテータは事情により当日参加できなかったため、事前に送付されたコメントを報告者が紹介する形でセミナーの前半が進められました。[田畑]

### ◆ フィンランドの2大学の学長の表敬訪問 ◆

フィンランドのオウル大学学長の Jouko Niinimäki 氏とラップランド大学学長の Mauri Ylä-Kotola 氏が11月15日にセンターを表敬訪問されました。お二人の学長は、北海道大学との交流をさらに発展させるために本学を訪問された機会に、特にフィンランドとの交流が密接におこなわれているいくつかのセンターを訪問されました。



センターからは、欧州ヘルシンキオフィス所長の田畑のほか、フィンランドとの交流実績のあるウルフ教授と後藤特任助教が対応し、教育学研究院のジェフリー・ゲーマン教授も加わりました。今後の研究交流やフィンランドと日本の教育や研究の状況など、幅広い意見交換がおこなわれました。[田畑]

### ◆ フィンランド大使の表敬訪問 ◆

Pekka Orpana フィンランド大使が12月17日にセンターを表敬訪問されました。大使は、フィンエアーの新千歳ーヘルシンキ直行便の就航に合わせて初めて北海道を訪れた機会に、北海道大学とそのいくつかのセンターを訪問されました。センターからは、田畑とウルフ教授、後藤特任助教が対応しました。この直行便を利用してさらに二国間の交流が進展することについて双方から期待が述べられました。[田畑]

### ◆ 研究会活動 ◆

ニュース 158号以降、センターでおこなわれた諸研究会活動は以下の通りです。[大須賀]

- 11月5日 Irina Morozova (レーゲンスブルク大、ドイツ) “On resource-dependency and neocolonialism in late Soviet Central Asia: The example of oil industry in Western Kazakhstan in the 1980s” (SRC 特別セミナー)
- 11月11日 Johannes Preiser-Kapeller (オーストラリア科学アカデミー) “New Rome in a Larger World: Entanglements and Teleconnections between Byzantium and the Slavic-Eurasian World of the 14th century CE” (SRC 特別セミナー)
- 11月13日 仙石学 (SRC) 「2019年10月：ポーランド議会選挙の総括」(昼食懇談会)
- 11月18日 アレクサンドル・ブフ (ヴィクトリア大学ウェリントン校) 「北東アジアの領土問題の社会構築: 韓国の『独島』と台湾の『釣魚台』を事例に」(客員研究員セミナー)
- 12月3日 Rozaliya Garipova (ナザルバエフ大学、カザフスタン/SRC) “Islamic Family Law in Imperial Russia: Empire, Legality and Religious Authority” (SRC セミナー)
- 12月4日 Gennadii Korolov (ウクライナ歴史研究所/SRC) “Between Internarium and ‘eastern Switzerland’: Belarusian and Ukrainian federative projects and making of national territories (1916-1921)” (SRC 特別セミナー)
- 12月9日 Jasmina Gavrankapetanović-Redžić (サラエボ大、ボスニア・ヘルツェゴビナ) “Post-Genocide Bosnian Muslims Female Identity: Visualizing” (SRC セミナー)
- 12月10日 Evgeny Dobrenko (シェフィールド大、UK/ SRC) “Late Stalinism: the Aesthetics of Politics” (SRC セミナー)
- 12月17日 秋山徹 (早稲田大) 「遊牧英雄の末裔たちの現代史 (1): あるクルグズ首領一族の軌跡 1916-1927」(客員研究員セミナー)
- 12月19日 Yaroslav Gorbachov (SRC) “On the Origin of the Old (North) Russian L-less Perfect” (SRC/JASRL ジョイント・セミナー)
- 12月21日 オルガ・トカルチュク氏ノーベル文学賞記念企画 小椋彩 (東洋大) 「キノコとシロンスクとトカルチュク: ノーベル賞作家オルガ・トカルチュクの翻訳より」
- 12月23日 共同利用・共同研究拠点「近現代の中央ユーラシアに関する共同研究」班セミナー 藤澤潤 (神戸大) 「ゴルバチョフの途上国支援政策とコメコン」
- 1月15日 公募プロジェクト型共同研究「現代ロシアの国内・国際産業連関についての総合的研究: ロシア新規大規模産業連関表の利用」報告会 久保庭真彰 (一橋大)・志田仁完 (ERINA) 「ロシアにおける国際垂直分業 (Vertical Specialization) の展開: 2011-2015年ロシア大規模産業連関表の利用」; 中村靖 (横浜国立大) 「ロシア経済の空間構造分析: 分析方法論とGISツールの開発」



- 1月25日 「スラブ・ユーラシア地域を中心とした総合的研究」報告会 小椋彩（東洋大）「中東欧のエコクリティシズム：出発と展望」；久保庭真彰（一橋大学名誉教授）「ロシア経済のグローバル・バリュー・チェーン：現状と展望」；松澤祐介（西武文理大）、山脇大（三菱UFJモルガン・スタンレー証券）「スラブ・ユーラシア地域における『ポストネオリベラル期』の経済政策比較」；松澤「EUの結束政策と中欧諸国」；山脇「気候変動とポピュリズム」
- 1月27日 加藤有子（名古屋外国語大）「スタニスワフ・イグナツィ・ヴィトキューヴィチの戯曲におけるエキゾチシズム」（客員研究員セミナー）
- 1月29日 道上真有（新潟大）「ロシアにおける外国人労働移民の居住環境の問題」（客員研究員セミナー）
- 2月4日 井出晃憲（稚内北星学園大）「樺太・サハリンをめぐる観光～国境・最北に魅せられて～」（客員研究員セミナー）
- 2月5日 Esen Usualiev（分析センター「思慮深い解決策」、クルグズスタン）「中央アジア諸国の自主的統合：諸国間の競争、矛盾の克服と信頼の向上（ロシア語）」（SRCセミナー）
- 2月6日 醍醐龍馬（小樽商科大）「小樽から見た日露経済交流史」（客員研究員セミナー）
- 2月12日 大串敦（慶應義塾大）「再編か刷新か？マイダン以後のウクライナ政治エリート」（客員研究員セミナー）
- 2月13日 Romuald Huszcza（ワルシャワ大、ポーランド）“Linguistic Evolution or Revolution? The Current Debate on the So-Called Femininative in Polish”（SRCセミナー）
- 2月17日 伊藤庄一（日本エネルギー経済研究所）「ロシアのエネルギー戦略の新展開：市場力学と地政学の相克」（客員研究員セミナー）
- 2月20日 「スラブ・ユーラシア地域を中心とした総合的研究」共同研究班「近現代の中央ユーラシアに関する共同研究」報告会 吉村貴之（東京大）「戦間期の在日アルメニア一家と日本の政治」
- 2月26日 斎藤慶子（SRC）「ブックトーク『「バレーエ大国」日本の夜明け』チャイコフスキー記念東京バレーエ学校1960-1964』理事長林広吉の仕事」（NIHUセミナー）

## 人事の動き

### ◆ 事務職員の異動 ◆

金山 みどり 事務補佐員 2019年10月31日退職  
坂口 夏海 事務補佐員 2019年12月1日採用 [事務係]

## 北海道中央ユーラシア研究会1月例会

諫早庸一（センター）

去る2020年1月28日、北海道中央ユーラシア研究会1月例会が開催された。報告者、題目および討論者は以下の通りである。

報告者：安木新一郎（函館大学）

題目：毛皮と貨幣から見たジョチ朝の成立

討論者：川口琢司（藤女子大学）

<http://src-h.slav.hokudai.ac.jp/casia/index.html>

【北海道中央ユーラシア研究会第135回例会】

# 毛皮と貨幣 から見た ジョチ朝の成立

報告者： 安木新一郎（函館大学）  
 討論者： 川口琢司（藤女子大学）

日 2020年  
 時 1月28日（火曜日）16:30-18:45

会場 北海道大学スラブ・ユーラシア研究センター  
 4階 小会議室（401）

**アクセス**

**A** 人文・社会科学 総合研究棟（V棟）から  
V棟の北端玄関先まで目印へ進み  
法字部棟を経由します。

**B** 附属図書館（札幌駅・北大正門方面）から  
附属図書館の北端玄関先まで目印へ進み  
渡り廊下を越え法字部棟に到達します。  
附属図書館前階段は●へ

法字部棟より2階へ上がります。  
 ・法字部棟2階に、当センターへの連絡通路がございます。（階から移動できません）  
 ・当センター名義の事務室、後の階段、またはエレベーターで4階へ上がってください。  
 ※各所の扉は上方向のロックがございます。おれせでご確認ください。

**アクセスマップ**

問い合わせ  
 北海道中央ユーラシア研究会事務局  
 ezo.eurasia@gmail.com

共催：北海道大学令和元年度若手研究加速事業「14世紀の危機」についての環境史的考察  
 駐車場はありません。公共交通機関でお越し下さい。

〈報告〉

報告者である安木新一郎氏（函館大学）はロシア経済を専門としながらも、近年モンゴル帝国の貨幣研究の分野で論考を次々と発表されている注目の研究者である。冒頭で安木氏は、ある意味ではロシアの基礎となったロシア平原のモンゴル系王朝であるジョチ朝の歴史を経済学的見地から見直すと、この報告の狙いを語った。安木氏は、ジョチ朝の創設について、モンゴル帝国の宗主チンギス（1227年没）の長子であったジョチ（1225/27年没）の次子バト（1255年没）が西方遠征によってロシア平原を平定し、旧サライを「首都」とした1243年頃とする見方をロシア中心史観として退け、その始まりを、ジョチがチンギスに部民と牧地を与えられた1207（～

1211）年頃にまで遡らせる。その議論は安木氏が主張するジョチ朝の構造とも深く関わるものであった。その主張は、ジョチ朝が、タイガ（シビル）からステップ（キプチャク）そしてオアシス（シル河流域・ホラズム）へと抜ける南北長距離交易に依存した商業帝国であったとするものであり、その主要交易品が毛皮であった。

こうした前提を冒頭で述べた安木氏が次に語るのは、現代ロシア経済との共通性と差異である。現代ロシアもまさにシビル地方チュメニの原油やヤマロネネツの天然ガスという資源に依存した経済財政構造を有しているが、レント（非稼得性の収入）自体は首都であるモスクワに集中している。その依存は帝政期においては毛皮輸出に対するものとして現れていた。そうした類似の一方で、こうしたレントは、ジョチ朝時代においては王朝側ではなく狩猟側に蓄積されていたのだと安木氏は語る。この収益の流れを知る鍵が、この発表で毛皮と並ぶもう1つの軸であった貨幣であった。はるかユーラシアを繋いだモンゴル帝国において、その統合の事実は貨幣にも反映される。それは例えば、「済国惠民」なる漢文が刻されたイスラム圏のディーナール金貨がジョチ朝の「首都」サライで見つかる、という事実に現れている。

チンギスの長男ジョチは、ケレイト族長家の女性を婚姻候補かつ婚姻相手としたことから、チンギスは当初彼を後継者と考えていたとする最近の研究を引く安木氏は、「森の民」と呼ばれ、帝国軍の中核となった部民たちに注目する。ジョチもまた、来る西方遠征に向けて「森の民」

とともにイルティシュ河上流域の牧地を与えられていた。『モンゴル秘史』に現れる「森の民」17集団を丁寧に分析した安木氏は、それが主にモンゴル高原を流れる川によって分類されていたことを語る。彼らこそ高原の北方域で毛皮を獲り、川を伝ってその取引を行う張本人であった。安木氏がジョチ朝創始のタイミングと場所として、この分民とイルティシュ河を重視するのはまさにこれゆえなのである。当時アフロ・ユーラシア各地で貴重な財と見なされていた毛皮は、その対価として銀をこの狩猟社会に蓄積させた。安木氏は『集史』のイスタンブル写本にのみ見えるソルクタニ（1252年没）による森の民からの「銀の略奪」をこの文脈で読み解いている。ジョチ朝側としては毛皮の対価としての銀の流出はまだしも、それをその地の社会の一般交換手段とすることは銀の流出を加速させる以外の意味を持たないゆえに避けたのだらうと、王朝がシビルに造幣所を置かなかった理由を安木氏は説明している。

しかし、一方でより西方、ジョチが1219～1221年のシル河中下流域の遠征において陥落させ、以後は冬営地としたジャンドにおいて、ジョチ自らが金貨を発行していたと安木氏は主張する。ジョチのタムガが入ったディーナル金貨を見せた安木氏は、モンゴル帝国にとっての「冬営地」の意味を、必要なヒト・モノを集めるための言わば「倉庫」のようなものであったとしたうえで、このディーナル金貨を徴税目的で使われていたものだとする。

最後に安木氏が語ったのが、ジョチ朝の二極構造である。バトの征西の後も、ジョチの長男であったオルダはイルティシュ河上流域に残り「左翼」としてオルダ・ウルスを形成した。一方で征西しクリミアまで至ったバトはヴォルガ下流域を中心に「右翼」のバト・ウルスを開く。左翼・右翼ともに北から南へ「間接統治」⇒「遊牧本領」⇒「境界領域」が連なる「南北構造」を共通させていた。さらにバトは甘粛西部・沙州にも分地を有していた。この「ジョチ家の東方領」は戸数で言えばそれなりの規模を誇っていたが、総管府が置かれるのは1337年のことで、それ以前の情報はあまり多くはない。

議論のまとめとして安木氏が確認したのが、徴税手段としての毛皮と金貨である。それは当時ユーラシアを往来していた銀貨でなくともよかった。銀（地金）の何よりの価値は、その価値尺度・価値保蔵手段として機能するところにあった。毛皮交易によってシビルの狩猟社会には銀が蓄積されていった。その退蔵を防ぐべく、王朝は銀以外の財——馬、鉄製品、タカラガイなど——を運ぶ必要に迫られる。その結果として、交易路の整備が整備され、交易の幹線であった河川ごとに集団を把握（チョルゲ、路）して徴税を行うというシステム形成が為された。それが以降の「民族」の形成にも繋がっていくのである。こうした一連の流れが、毛皮交易がジョチ朝という帝国の形成を促したという安木氏のテーゼを支えている。銀貨の徴税手段化はバトの征西以降のことであり、その時期においてさえ、王朝側から見れば銀貨に機能を統一することは必然ではなかったことを確認して、安木氏は報告を締めくくった。

〈コメント〉

続いて討論者の川口琢司氏（藤女子大学）からコメントが寄せられた。川口氏はティムール朝史研究についてすでに2冊の本を上梓されているこの分野の第一人者でありかつ、ジョチ朝についても種々の論考で分野をリードしている。川口氏の総評は、安木氏によるジョチ



研究会のようす



朝を貨幣史から見るという試みは、少なくとも日本においては斬新と言えるし、主に収奪という観点から語られるモンゴル帝国の初期史の理解に、毛皮という軸を持ち込んでジョチ朝を商業帝国として語った視点にも新規性があるというものであった。

このように報告の意義を確認したうえで川口氏が触れたのが、ジョチ朝の貨幣史について——特に旧ソ連圏において——積み上げられた蓄積であった。ソ連時代から連綿と重ねられてきた貨幣史研究は、現在も新進気鋭の若手研究者であるパベル・ペトロフの研究に代表されているように深化が進んでおり、現在は専門雑誌が定期刊行されて地域ごとに研究が細分化される段階まで来ていると。そうした研究蓄積に対しては——あまり引用がなかったので——どのように考えるのか、との質問であった。一方で、そうした諸研究を見ても安木氏が提示したディーナル金貨以外にはジョチの発行とされる貨幣は現在に至るまで知られておらず、仮にこれがジョチのものであるならば、確かに王朝史に再考を促すレベルの大発見であることを確認した。

ただし一方で、安木氏が扱ったモンゴル人貨幣研究者ニャマー氏のタムガについての議論は推論を重ねる形式になっており危ういと指摘した。そしてコメントの核心として、金貨に刻されたマークは本当にジョチのタムガと言えるのかと問いかけた。安木氏は金貨の上段中央に刻された円形に下線を付したマークをジョチのタムガとしたが、アラビア語銘を読み直す川口氏は、これが「至大なるイマーム (al-Imām al-A‘ẓam)」の連語に現れる「イマーム」の最後のミームではないかと指摘した。しかも、これが後に続くようにアッバース朝カリフ「アンナースィル・リ・ディーニッラー (al-Nāṣir li-Dīn Allāh)」(在位 1180～1225年)の名前と一緒に現れることをどのように考えれば良いのかとも加える。以上のことを考えれば、これをジョチ発行の金貨とみるのは難しいのではないかとのコメントであった。

#### 〈議論〉

コメントへの応答として安木氏は、確かにこれをタムガと見るのは難しいかもしれないしつつ、アッバース朝カリフ・ナースィルについては、彼の治世後も彼の名前で貨幣が打刻される例は知られていると補足した。

その後、議論がフロアに開かれた。諫早は司会権限を行使し、議論をまずはこの「ジョチ発行金貨」についてのみ限定させていただいた。確かにカリフ・ナースィルについて、その名を刻した貨幣が彼の死後も発行される事実はあるものの、彼とジョチのペアにはやはり無理があるのではないかとの指摘がなされた。少なくとも帝国の宗主チンギスを差し置いて、この両名が貨幣に現れるのは考えにくいであろうとのことであった。さらにイスラム圏の「スィッカ(貨幣)とフトバ(金曜礼拝での名乗り)」にも言及が為され、貨幣の面や金曜礼拝の場において自らの名を記させ、また名乗らせることはイスラム圏における権威の象徴であり、やはりジョチが「徴税目的として」発行した金貨にカリフの名が現れると考えるのには無理があるのではないかとの指摘があった。ナースィルの名が、彼が死んだ後も貨幣に刻されるというのは、その「事実」自体再考に値するのではないかとの意見も出された。

次にはこれが《金貨》であるということに対する議論が続いた。そもそも、イスラム圏の東方においては11～13世紀にかけて深刻な《銀危機》があった。これを受けて、セルジューク朝(1038～1157年)やガズナ朝(955/977～1187年)、モンゴルが滅ぼしたホラズムシャー朝(1077～1231年)といった在地の諸王朝は金貨を発行するようになる。カリフ・ナースィルの金貨もまさにこの文脈で出てくるものであり、やはりこれはジョチとは関係なく、それ以前の金貨なのではないかと。確かにモンゴル帝国もその統治のほんの一時期に、チンギスの名やウイグル文字が刻された《金貨》を西アジアで発行するが、それはほとんど流通せず、その後1270年代には財務官として中央アジアの行政を任されたマスウード・ベク(1289年没)が財政改革をおこなって銀貨を流通させる。こうした点からも「ジョチ発行の金貨」という議論には難点があるのではないかということであった。

この議論に関わって、「徴税と貢納」とをしっかりと分けて考えるべきだという意見も出た。徴税に組み込まれた貨幣システムとして回ったのは銀貨であり地金であるわけだが、貢納品としての金貨の価値は確かにあったのではないかと。銀貨が流通の主であったとしても、それは金貨が存在し、また交易に意義を有していたことを否定するものではないとの意見であった。さらに、財政改革の後であっても、これまでの貨幣はどうなったのか、例えば「受け取り拒否」のような事例が生じていたのか、こうした市場の反応を捉えられないと、カリフの銘が現れることや、金貨・銀貨の別のような議論は難しいのではないかと指摘も為された。金貨/銀貨という話に関しては、さらにヨーロッパ側からの事例として、イタリア半島では1250年代には北アフリカ交易で流れてきた金を軸に据えた決済システムが確立されることが語られた。そしてこれはビザンツをコンスタンティノープルから放逐して立ったラテン帝国(1204～1261年)とそれを支えたヴェネツィアを通じて、黒海交易にも影響を及ぼしている可能性があるとのことであった。それは、金貨そのものが流通するというよりは、金貨の存在を担保とした信用システムが確立するということであり、流通量と影響力とがシンクロしない局面がまさに同時代にあったことが語られた。同時代のユーラシア東西の事例という点に関しては、当時の日本の事例も俎上に載せられた。良く知られているように、日本の公権力は自前で貨幣を鑄造していなかった。そうした例に鑑みても、シビル地方に関して安木氏が展開した、欲しい交易品が手に入りにくくなるかもしれないので造幣所を置かなかつたとする議論は杞憂なのではないかとの意見であった。貢納品は当該物品を納めることに意味があるため、そもそも代替がきかないものだった可能性も考えるべき、という意見も合わせて出されている。

これらの諸点を踏まえて、話は「南北交易」を重視するとした王朝の構造にも及んだ。確かにタイガからの毛皮交易の重要性は間違いないものの、それを王朝の主要交易品と見る見解はどうなのかと。イルティシュ河流域を拠点としてタイガと密に繋がった左翼はともかく、黒海と面していた右翼ウルスにとって——少なくとも文献資料から見て——圧倒的な重要性を持っていたのは奴隷交易であった。これがある意味では、ジョチ朝とマムルーク朝(1250～1517年)とイル・ハン朝(1256～1357年)の三者間やその仲介者としてのヴェネツィア、ジェノヴァ、ビザンツ帝国(～1453年)にラテン帝国といった諸勢力の動向を大きく規定していた。そしてこれは位置的には「東西」の交易とも呼べる。「東西」という点に関しては、漢地にあった「ジョチ家の東方領」にも話が及んだ。絹や陶磁器に香料といった衆目を集める交易品が押し並べて東方にあったこの時代、その対価となった銀は当然のことながら、西から東へと流れていく。しかし、出土貨幣からは確かに見える東から西への銀の流れをどう理解すればよいのか、これについて黒田明伸氏は、「ジョチ家の東方領」のような西方三王家が漢地に有していた分地からの「送金」の重要性を語っている。



研究会のようす 2

ここでは「ジョチ発行貨幣」、「徴税と貢納」および「南北交易」といった大きな議論の流れのなかにあった意見のうちで、諫早が捕捉できたもののみをまとめたが、これだけを見ても分かる通り、安木報告の根幹について、その是非をめぐる議論が大いに盛り上がった。当日は本州から、モンゴル帝国史を専門とする四日市康博氏(立教大学)やヴァイキングの専門家である小澤実氏(立教大学)、また九州からもブリテン中世史を専門とする鶴島博和氏(熊本大学名誉教授)など、遠方からそれぞれの分野を牽引する研究者の方に御参集いただき、

討論がより深いものとなった。また、北海道大学内からも、日本中世史が専門の橋本雄氏や西方イスラム圏を専門とする佐藤健太郎氏といったユーラシア東西それぞれについて造詣の深い先生方にもお越しいただくことができ、議論の幅を大いに広げることができた。御参加の皆様にご心より感謝するとともに、この高い凝集力の中心にいた報告者の安木氏にあらためて深い感謝を捧げ、このレポートを締めくくりたい。

## 「学士院会員ユーリー・アプレシヤン 90 歳記念 研究集会」に出席して

野町素己（センター）

2020年2月3日・4日に、モスクワのロシア学士院附属ビノグラードフ名称ロシア語研究所にて、表記の研究集会が開催された。ユーリー・デレニコビッチ・アプレシヤン氏は上研究所およびハルケビッチ名称情報伝達問題研究所に所属する研究者で、1992年にロシア学士院の正会員に選出されている。アプレシヤン氏は、ロシアを代表する世界的な言語学者の一人であり、いわゆる「モスクワ意味論学派」の創設者のひとり、またリーダーである。もともとは英語を題材とした一般言語学者としてキャリアを始めたが、主要な業績はロシア語を中心としたもので、西側の言語理論も幅広く消化しながらも、緻密な分析で独自の観点に秀でた語彙論、意味論、統語論研究で著名である。2012年の時点での氏の業績は313点、うち著書は13冊（共著含む）にのぼる<sup>(1)</sup>。単著のうち1966年に刊行された『現代構造言語学の原理と方法』は10か国語に訳され、1988年には谷口勇氏による日本語訳が文化書房博文社から刊行されている。アプレシヤン氏の著作で最も著名なのは、おそらく1974年に刊行された『語彙意味論』であり、初版刊行から40年以上を経た現在も多く参照され、言語学の古典となっていると良い<sup>(2)</sup>。ここしばらくは様々なタイプの語彙研究、辞書編纂に携わっていて、現在は『能動的ロシア語辞典』の4巻の執筆でお忙しい模様である。

この研究集会ではアプレシヤン氏の同僚や教え子、ゆかりのある研究者による26の研究報告が行われた。アプレシヤン氏の長年にわたる交流を考えると、この数は極めて小さいと言わざるを得ないが、今回の研究集会の組織者で、アプレシヤン氏の側近であるレオニド・イヨムディン氏やイーゴリ・ボグスラフスキー氏に加えビクトル・フラコフスキー氏、スベトラナ・トルスタヤ氏、アンドレイ・キブリク氏、ウラジミール・プルンギャン氏、アンナ・ザリズニャク氏、アントン・ツィンメルリンク氏、アレクセイ・シメリョフ氏といった、今日のロシアの言語学で活躍する様々の世代の研究者が参加した。組織委員会からは事前にアプレシヤン氏の功績にちなむ報告を準備することが提案されていたが、実際にはそれにこだわらず、それぞれの研究者が、それぞれのアプローチで自分の成果をアプレシヤン氏に示す機会であったように思う。事実、モスクワ意味論学派的な研究報告以外にも、音声学からコーパス言語学や方言学まで、テーマは多様であった。詳細なプログラムはリンクを参照されたい (<http://www.ruslang.ru/doc/apresjan-conf.pdf>)。なお、アプレシヤン氏は2019年12月に大きな手術を受けたため、そもそも本研究集会が開催されるかどうかは直前まで不明であった。したがって、ビザや航空券の関係もあったのだろう、海外からの参加者はティルマン・

1 Boguslavskij I.M., Iomdin L.L. Jurij Derenikovič Apresjan. M., 2012.

2 1995年には選集の1巻として、第二版が刊行されている。Apresjan Ju.D. Izbrannye trudy, tom 1. Leksičeskaja semantika. M., 1995.



ロイター氏（クラーゲンフルト大学）、ロザンナ・ベナッキオ氏（パドバ大学）および私の3名のみであったが、予定されている記念論集には、出席できなかった外国人研究者の論考も掲載されるという。

研究集会の初日は会場が満席であり、アプレシャン氏がしっかりした足取りで会場に入ると、全員起立し拍手で氏をお迎えした。手術の直後で少々やつれているようには見えませんが、それでも氏の年齢を考えると、大変お元気であったように見えた。語彙論研究者のレオニド・クリンシンの氏によるアプレシャン氏との思い出語りや古い写真のスライドショーから始まり、実に和やかな雰囲気では進行した<sup>(3)</sup>。なお、自分の発表後に会場を後にした研究者も目についたが、アプレシャン氏は、文字通り最初から最後まで、全ての報告を聞いていた。心の中ではコメントもあつただろうが、一言も発さず、またうつらうつらすることもなく、終始注意深く聞いておられたが、その集



報告を聞くアプレシャン氏（ロシア語研究所の Facebook より）

中力と体力はまさに驚嘆に値する。すべての報告が終わると、アプレシャン氏は「二日間の研究報告はどれも素晴らしいものでした。私は敢えて言いますが、直接的であれ間接的であれ、皆さんのような『弟子』に恵まれて幸せです。私がやってきたことを弟子が乗り越えてくれることが私の喜びであり、そしてそれが今日のような場で見られて幸せです」とおっしゃったのが印象的であった。頂点に立つ年長の研究者としての自負は感じられるが、謙虚であり、あらゆる世代に分け隔てなく敬意払うことができる人柄が、その言葉と振る舞いからにじみ出ている。世界的に著名な学派を築き、優れた研究者を多く育てた背景には、アプレシャン氏の実力に加えて、慕われる人柄も重要であり、そして真に指導的立場にある研究者はこうあるべきと改めて思った。研究会終了後の懇親会では、1970年代にロシア語研究所およびロシア語学界を牛耳っていて、アプレシャン氏が「悪の具現体」とささ呼ぶフェドト・フィリン氏との確執<sup>(4)</sup>、ニキータ・トルストイ氏との友情や戦略的な博士号取得などの思い出話を花を咲かせていた<sup>(5)</sup>。また、理論言語学研究のセルゲイ・クリンシロフ氏がギターを手に取って現れ、オクジャワなどを弾き語ると、アプレシャン氏も懐かしそうに一緒に歌っておられた。

さて、私はアプレシャン氏の教え子でもなければ、特に近い研究者でもない。ではなぜ参加することになったのか。多少長くなるが、備忘録としても書いておくと、私がアプレ

3 クリンシンのテキスト、モルドバン氏とソボレフスキー氏の挨拶の全文はこちらのリンクを参照されたい。<https://trv-science.ru/2020/02/11/apresyanu-90/>

4 アプレシャン氏はフィリン氏からありとあらゆる嫌がらせを受けた。論文の刊行禁止、著作の原稿消失を含んだ出版の妨害、またフィリンが所長を務めていた1972年、アプレシャン氏はロシア語研究所から解雇された。この一連については、注2の著作の「第二版に寄せる前書き」に詳しく書かれているので参照されたい。

5 アプレシャン氏は博士号を取得するのに十分な業績は有していたが、氏の著作は事実上禁書扱いを受けていたため、モスクワで博士号を取得するのが困難であった。これを問題に思ったトルストイ氏は、1983年キエフで国際スラビスト会議が開かれ多くのスラブ語学者がそちらに行っている間に、盟友アダム・スプルン氏の助力を得て、ミンスクにて、事実上言及禁止の『語彙意味論』をもって、アプレシャン氏の博士号取得を電撃的に解決したという（夫人のステラナ・トルスタヤ氏の談による）。



思い出話を披露するアプレシャン氏

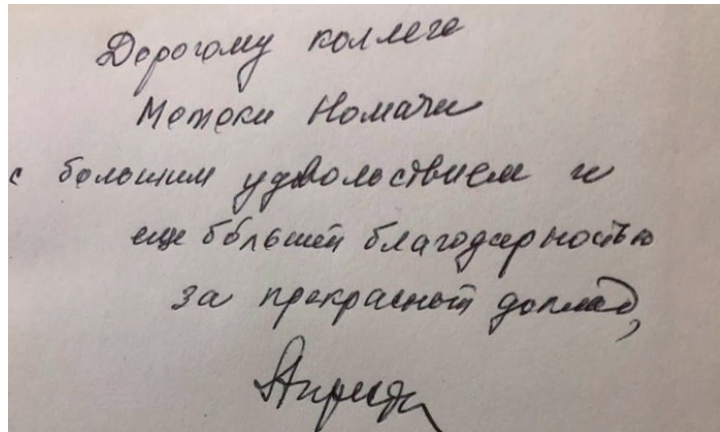
シャン氏の著作を知ったのは学部三年生のときで、何を勉強してよいのかわからず、図書館に行って上記の『現代構造言語学の原理と方法』の日本語訳を偶然手に取ったのが始まりである。執筆時に30代前半であったアプレシャン氏の膨大な知識と具体的で説得力ある論に圧倒されたが、この本がきっかけで言語学を勉強し

てみたいと漠然と考えた。その後修士論文で『ロシア語動詞意味論の実験的研究』(1967年)、上記の『語彙意味論』や他の論文を参照することがあったため、アプレシャン氏の著作自体には親しみが常にあったが、ご本人と知り合う機会があろうとは夢にも思わなかった。

アプレシャン氏に初めてお目にかかったのは2005年である。ベオグラードに留学していた時、当時の指導教官であったプレドラグ・ピペル氏が「国際スラビスト会議スラブ諸語文法構造研究部会(通称:文法部会)」をノビ・サド(セルビア)で組織したが、それにあわせてベオグラード大学文学部にて、動詞アスペクト論で著名なアレクサンドル・ボンダルコ氏(2016年逝去)およびアプレシャン氏の特別講義がおこなわれた。お二人とも大変高名な学者で、私ごときは全く話し相手にならないのは明らかだったが、ピペル氏は教育的配慮に大変行き届いた人で、両氏の講義前に私を研究室に呼び、私を両氏にわざわざ紹介し、私の研究の関心領域などについて話す時間をとってくださいました。アプレシャン氏の講義では、語彙選択を「甘いスイカの上手な選び方」に例えて話すなどユーモアも多く、この時から著作上の抽象的なアプレシャンから、実際に人間であるアプレシャンへのイメージの変化が起きたように思う。次にアプレシャン氏にお目にかかったのは2011年の札幌で、上記文法部会の国際会議がSRCで開催されたときである。そこで私が部会委員に選出されたため、以後、定期的におこなわれる文法部会の会議でアプレシャン氏にお目にかかるようになった。今回はその関わりで、組織委員の方々は私にも声をかけてくださったのだと想像する。

私の印象では、アプレシャン氏のご自分の意見を常に明確にされる方で、時に厳しく、歯に衣着せぬ発言もされるが、基本的に非常に気配りに長けた優しい人だと思う。2015年、モスクワで文法部会の会議が開催されたとき、アプレシャン氏は2006年にモスクワで刊行された『言語的世界像と組織的辞書編纂』という厚手の研究論集を数人の親しい研究者に手渡していた。私はちょうど休憩室に行くところで、速足にその横を通り過ぎた。休憩室から戻ると、アプレシャン氏が私を手招きして「残念なことに、君にあげる本がないんだ」と言うので、私は驚いて「とんでもございません。いただきたいと思ったことはありません」と狼狽しながら答えたが、もしかしたら一瞬でも物欲しそうな顔が出て、それを氏に見られてしまったのかと恥じ入るばかりであった。翌日の午後、そのことをすっかり忘れていたところ、ア

プレシャン氏は私をご自身の研究室に呼び、「これでもいいかな」と言って、別の人に進呈する予定でサインが入った本を見せ、そのページを丁寧に破りとり、改めてご自身のサインを入れて私に下さった。私はどちらかというと綺麗な本が好きだが、この本に限って言えば、傷んでいるからこそアプレシャン氏の優しさ、鋭い観察眼、小さな



アプレシャン氏からの献辞「親愛なる野町素己さんへ、大きな喜びと、そして素晴らしい研究報告へのさらに大きな感謝を込めて

ことにも真摯な姿勢を感じる特別な存在となっている。今回も氏の細かい気配りを感じた。一日目には、主賓であるアプレシャン氏の周りは常に人だかりで、私は直接話すこともなかりろうと思っていたが、それでも氏は私を見つけ「モトキ・ノマチ、ここにあなたがいてくれて本当にうれしい」と言って、にこやかに握手してくださった。二日目は、私のつたない発表の後「素晴らしい発表をどうもありがとう」と言って、再び力強く握手をされ、1974年刊の『語彙意味論』にサインを入れて私に下さった。

私は外国語研究者として「なぜロシア語やスラブ語に興味を持ったのか」と聞かれることが多いが、その時は大体相手の関心に沿うように「旧ソ連の歴史を勉強したかったから」、「ロシア文学を原文で読んでみたかったから」というのを組み合わせて答えている。ただ、実際には「アプレシャンの本を読んだから」というのも答えであろう。私はロシア語研究からやや離れてしまったが、今回の研究集会に参加して、自分の原点はロシア語学であることを再認識し、間接的であれ、そこに導いてくれたアプレシャン氏に改めて感謝したいと思う。そして氏の90歳を心からお祝いすると同時に、これからもますますのご健康と学術的成功を祈るばかりである。

## 学 界 短 信

### ◆ 学会カレンダー ◆

- 2020年4月1-4日 The ABS (The Association for Borderlands Studies) 2020 Annual Conference 於ポートランド  
<https://absborderlands.org/meetings/annual-meetings/>
- 4月3-5日 BASEES (British Association for Slavonic and East European Studies) Annual Conference 2020 於ケンブリッジ大学  
<http://basees.org/conferences/>
- 6月20-21日 第60回比較経済体制学会全国大会 於西南学院大学  
<http://www.jaces.info/info.html>
- 6月27-28日 日本比較政治学会第23回研究大会 於大阪市立大学  
<http://www.jacpnet.org>
- 7月2-3日 スラブ・ユーラシア研究センター 2020年度夏期国際シンポジウム



- 8月4-9日 ICCEES 第10回大会 於モントリオール <http://iccees.org/>  
10月15-18日 21st Annual CESS (Central Eurasian Studies Society) Conference 於オハイオ州立大学 <https://www.centraleurasia.org/conferences/annual/>  
10月17-18日 ロシア・東欧学会 2020年度研究大会 於北海道大学  
<https://www.jarees.jp>  
10月23-25日 日本国際政治学会 2020年度研究大会 於つくば国際会議場  
<http://jair.or.jp>  
10月31日-11月1日 日本ロシア文学会 2020年度全国大会 於大阪大学 <http://yaar.jpn.org>  
11月5-8日 52nd Annual ASEEEES (Association for Slavic, East European, and Eurasian Studies) Convention 於ワシントンDC <https://www.aseees.org/convention>  
11月14-15日 ロシア史研究会 2020年度大会 於岡山大学津島キャンパス  
<https://www.roshiashi.com> [編集部]

## 会議 (2019年11月～2020年1月)

### ◆ センター協議員会 ◆

2019年度第2回 11月12日(火)

- 議題
1. 教員の人事について
  2. センター長の辞任について

2019年度第3回 1月7日(火)

- 議題
1. 次期センター長の選出について
  2. 教員の人事について
  3. 研究生の受入(新規)について

2019年度第4回 1月17日(金)

- 議題
1. 教員の人事について
  2. 客員研究員の採用及び称号付与について

### ◆ センター共同利用・共同研究拠点運営委員会 ◆

2019年度第2回 1月25日(土)

- 議題
1. スラブ・ユーラシア研究センター共同研究員の選考について

### ◆ センター共同利用・共同研究拠点課題等審査委員会 ◆

2019年度第2回 1月25日(土)

- 議題
1. 共同利用・共同研究公募課題の審査について
- [事務係]

## みせらねあ

### ◆ 木村汎氏のご逝去によせて ◆

北海道大学の名誉教授で、本センターの功労者でもある木村汎先生が2019年11月14日の朝、他界されました。先生は長年、「ミスター・スラ研」と言われるほどに本センターの顔

として活躍され、わが国の対ロシア外交研究の第一人者として学界を牽引されてこられました。先生は、とくに北方領土問題にかかわる研究や提言で知られており、日本の対外政策決定にも少なからぬ影響を与えてこられました。ロシアの対中、対米関係にも造詣が深く、とくに交渉とは何かという観点から外交を省察されておられました。近年はプーチンの政治の研究に労力をさかれ、大著を次々と刊行され、先生のパワフルなお仕事ぶりに私たちは日々、圧倒されるのみでした。

先生の葬儀は17日に、ご自宅近くの西宮で営まれ、弔辞は盟友ともいえる袴田茂樹先生が読まれました。センターからは副センター長の田畑が代表して参列しましたが、北大の笠原理事ほかセンター内からも複数の花輪が届けられていました。木村先生は、センターが1970年代、80年代に国内的にも国際的にも発展していくそのプロセスに大きな貢献をなされた方ですが、30代から50代の貴重な時期を先生はセンターで過ごされており、そのお仕事が何よりも常にセンターとともにあったことを改めて感じました。一同、心よりご冥福をお祈りします。[田畑 / 岩下]



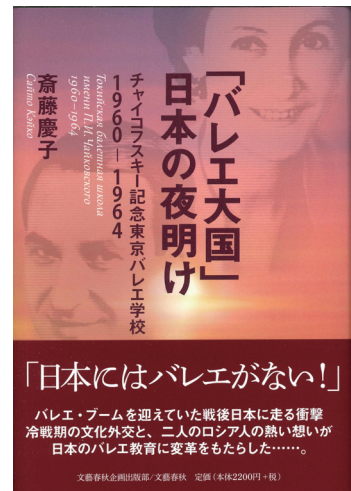
1991年3月最終報告会における木村氏

#### ◆ 斎藤慶子『「バレエ大国」日本の夜明け チャイコフスキー記念東京バレエ学校 1960-1964』(文藝春秋企画出版部、2019年)の刊行 ◆

拙著を出版できたのは、非常に幸運なことでした。これはひとえにたくさんの方々のご協力によるもので、本書のあとがきに少し書かせていただきました。2019年1月に早稲田大学に提出した博士論文は「日本バレエ教育史における転換点—チャイコフスキー記念東京バレエ学校(1960-1964)とソヴィエト・バレエ—」と題し、ソヴィエトのバレエ史にも多くの紙幅を割いたものでしたが、同年12月の書籍化にあたり日本の事象に的を絞りました。

「バレエ大国」というのは、世界の劇場やコンクールで活躍する日本人たちが多数いる現状を指してよく使われる表現です。しかし一方で日本ははまだ、職業的舞踊家育成のために必要な条件をそろえたバレエ学校や、職業として成立する条件をダンサーに提供できる劇場を自国に持ちません。「」付きで記したのはそのようなわけです。

本書では、そのような困難な環境の中でも、日本のダンサーたちが活躍するようになったきっかけを、かつて東京都世田谷区に存在したバレエ学校に求めました。時は冷戦の真っただ中で、まさに米ソの文化外交の中で生まれたのがチャイコフスキー記念東京バレエ学校でした。本書は、日本のバレエ黎明期の歴史について書いたものですが、昭和の人々の熱い交流の記録としても読めることと思います。バレエだけでなく、文化外交や民俗学などに関心がおありの幅広い読者に手に取っていただくことを願っています。[斎藤]



## 目 次

研究の最前線 .....	1
2019年度冬期国際シンポジウム《帝政ロシアの地方再訪:文学的想像力と地政学》 開催される／NIHU 北大拠点共催シンポジウム「鹿児島で北東アジアを考える」 ／上智大学村田ゼミ合宿／サンクト・ペテルブルク大学から文学・文化研究者 二名を招へい／北海道大学共同利用・共同研究拠点アライアンス部局横断シン ポジウム「計算科学が拓く汎分野研究」／RCCZ-NIHU ラウンドテーブル「北 東アジアをめぐる日韓の対話:平和、安全保障、エンパワーメント」／ArCS テー マ7総括シンポジウム開かれる／スラブ・ユーラシア叢書『北極の人間と社会: 持続的発展の可能性』の刊行／2020年度「スラブ・ユーラシア地域(旧ソ連・ 東欧)を中心とした総合的研究」にかんする公募結果／専任・非常勤研究員セ ミナー／フィンランドの2大学の学長の表敬訪問／フィンランド大使の表敬訪 問／研究会活動	
人事の動き .....	15
事務職員の異動	
北海道中央ユーラシア研究会1月例会 .....	15
by 諫早庸一	
「学士院会員ユウリー・アプレシヤン90歳記念研究集会」に出席して ..	20
by 野町素己	
学界短信 .....	23
学会カレンダー	
会議(2019年11月～2020年1月) .....	24
センター協議委員会／センター共同利用・共同研究拠点運営委員会／センター共 同利用・共同研究拠点課題等審査委員会	
みせらねあ .....	24
木村汎氏のご逝去によせて／斎藤慶子『「バレエ大国」日本の夜明け チャイ コフスキー記念東京バレエ学校 1960-1964』(文藝春秋企画出版部、2019年) の刊行	

---

2020年4月1日発行

編集責任	大須賀みか
編集協力	宇山智彦
発行者	仙石 学
発行所	北海道大学スラブ・ユーラシア研究センター 060-0809 札幌市北区北9条西7丁目 Tel.011-706-3156、706-2388 Fax.011-706-4952 インターネットホームページ: <a href="http://src-h.slav.hokudai.ac.jp/">http://src-h.slav.hokudai.ac.jp/</a>

---